

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00831

研究課題名(和文) 動画ベースの非同期型コミュニケーションを主体とする二言語異文化交流の活動設計

研究課題名(英文) Designing bilingual intercultural exchange programs centered on video-based asynchronous communication

研究代表者

山内 真理 (Yamauchi, Mari)

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：40411863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：(1) 2019年の交流実践により、「動画をベースとした非同期型コミュニケーション」によるオンライン異文化交流が、「やりとり」能力がA1からA2レベルの日本人学習者にとって有効な英語使用機会となり、英語に対する苦手意識の克服と、学習意欲、英語でのWTC、異文化交流に対する積極性等の向上に寄与していることを確認した。

(2) ビデオ会議の普及を受け、「同期型」の交流に関する知見も蓄積し、非同期・同期を含めた交流のオプションを整理すべく、2020年度に同期型「交流」実践を試みた。想定していた言語不安などの要因に加え、話者交替の文化差も留意すべき重要要因であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オンラインでの異文化交流・国際交流は、コロナ禍を契機に一気に身近な活動となっている。本研究では主に動画交換をメインとする日本語を学ぶ英語話者との言語文化交流活動を提案する。授業活動の一部となるグループワークとして動画交換を行い、両サイドとも日本語と英語を併用することで、英語運用能力が未発達な学習者でも、英語を使って文化的な学びを得る有益な学習経験を持つことができる。授業の一部として運用しやすい柔軟な交流タイプでもある。もう一つ、ビデオ会議を利用するリアルタイムの交流についても実施可能性を検討しているが、こちらの実施の際は、「話者交替」の文化差について参加者も教員も理解しておく必要がある。

研究成果の概要(英文)：(1) Based on the 2019 exchange project, it was confirmed that online inter-cultural exchange using video-based asynchronous communication is an effective opportunity for Japanese learners with A1-A2 level of English proficiency to use English, which can help them overcome their perceived incompetence in English and improve their motivation to learn English, WTC in English, and attitudes toward inter-cultural exchanges.

(2) With the widespread use of videoconferencing, in order to gain insights into "synchronous" exchanges as well, and to propose a set of feasible options of online language-culture exchanges, in both asynchronous and synchronous modes, synchronous "exchange" sessions as a routine in class were attempted in 2020. Based on the participants' performance, reflections and interviews, cultural differences in turn-taking can be an important factor to be taken into account in implementing synchronous exchanges, in addition to the assumed ones such as language anxiety.

研究分野：英語教育, 言語学

キーワード：動画交換による異文化交流 ビデオ会議による異文化交流 オンライン交流のカリキュラム化 話者交替 L2不安 WTC

1. 研究開始当初の背景

(1) パイロットスタディからの手応え：英語学習者の「第二言語不安」の軽減や「第二言語における自信」の向上にとって、実際に「通じた」経験を重ねることが効果的であることは明らかであり、2017年のパイロットスタディにより「グループ動画をベースとした非同期型コミュニケーション」を主体とする交流活動が、英語への苦手意識(特に自分の話す英語に対する過度の自信のなさ)を払拭するのに役立つことが確認でき、英語習熟度が低く(発信面では CEFR A1~A2 レベル)自信のない学生にとっても参加・貢献が十分可能であることが示唆された(山内, 2018)。このパイロットスタディも踏まえて、「(1)グループで撮影した動画の交換を主体とし(2)二言語を併用し(3)非同期で(4)小グループ内をやりとりを行う」形でのオンライン交流が、英語を苦手とする日本人学習者にとって有効な英語使用機会となり、彼らの英語に対する過度な苦手意識の克服と、学習意欲、英語での WTC、そして異文化交流に対する積極性等の向上に寄与することを検証しようとした。

(2) 実践モデルの必要性：本研究で提案する交流活動が有効であるなら、一般的な英語授業のシラバスに「通常の」学習活動として組み込めるような実践モデルを提示すべきであると考え、「動画ベースの非同期型コミュニケーション」を主体とするオンライン交流のノウハウを蓄積し、実践モデルを提示しようとした。

(3) コロナ禍の影響(2020年度以降)：本研究で提案しようとした「授業活動としての交流」には、キャンパスや出先でのグループ動画撮影や、教員からの支援・アドバイスも受けながらのコメントのやりとりなどの活動が含まれていた。「対面」環境を想定したこれらの活動が行えなくなり、また、ビデオ会議の急速な普及により「オンライン交流」の捉え方そのものも変容しつつある中、「コロナ後」を見据えた交流の実践モデルが必要になると考えた。

2. 研究の目的

(1) 当初の目的：本研究の目的の一つは、「動画をベースとした非同期型コミュニケーション」によるオンライン異文化交流が、英語を苦手とする日本人学習者にとって有効な英語使用機会となり、彼らの英語に対する過度な苦手意識の克服と、学習意欲、英語での WTC、異文化交流に対する積極性等の向上に寄与しうることを検証することであった。本研究で提案しようとした交流実践には、①参加者が作成した動画の共有とそれに基づく文字コメントのやりとり、②非同期型コミュニケーション、③自身の学習言語を母語とするパートナーとの言語交換、④グループ課題としての動画作成および小グループ内でのやりとり、⑤Facebook グループの利用という要素が含まれる。①～⑤のそれぞれについて実践を評価し、「動画ベースの非同期型コミュニケーション」を主体とするオンライン交流のノウハウを蓄積して一般的な英語授業のシラバスに「通常の」学習活動として組み込めるような実践モデルを提示することが第二の目的であった。

(2) コロナ禍以降の目的：ビデオ会議の一般化が今後も進むと考えられたことから、「同期型」の交流のノウハウを蓄積し、非同期・同期を含めた交流のオプションを整理しようとした。そのために、「同期型」の交流活動を試行し、ビデオ会議における日本人学生のコミュニケーション行動を観察するとともに、日本人(英語学習者)に特徴的なコミュニケーション行動が、「同期型」交流に参加する英語話者から見てどのように感じられるのかを探ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 「動画をベースとした非同期型コミュニケーション」によるオンライン異文化交流の評価：2018年度の実践の評価を踏まえ(山内, 2019)、改良したプロジェクト設計に基づいた実践を行った(山内, 2020)。①参加者が作成した動画の共有とそれに基づく文字コメントのやりとり、②非同期型コミュニケーション、③自身の学習言語を母語とするパートナーとの言語交換、④グループ課題としての動画作成および小グループ内でのやりとり、⑤Facebook グループの利用というプロジェクト要素と、第二言語不安や英語使用への自信などの学習者意識の変化について、事前事後のアンケートや振り返りレポートをもとに検討した。については、2020年度以降、他のプラットフォーム(Flip)による「非同期型」交流を試行し、プラットフォームの交流行動への影響も検討した。

(2) 「同期型」交流の実施上の課題：少なくとも「やりとり」の領域で CEFR A1~A2 レベルである日本人英語学習者にとって、ビデオ会議でのコミュニケーションは様々な面で困難が感じられるだろうと想定された。2020年度に試行したオーストラリアの日本語学習者との自由参加型交流、授業時間内のアメリカの学部卒業生とのグループ会話、授業内活動としての日本人同士のグループ会話について、利用可能な録画データやインタビュー、振り返りレポートをもとに、彼らの行動と意識を観察した。並行して、の協力者であるアメリカの学部卒業生についても、振り返りレポートとインタビュー、利用可能な録画データを元に、本研究の対象となる日本人大学生とのコミュニケーションにおいて、どのような点に困難を感じるのか(感じないのか)を明らかにする。

(3) 「授業活動」としてのオンライン交流の実践モデル：(1)(2)を元に、英語習熟度の低い学習

者に対する授業活動としてのオンライン交流について、期待できる効果と実施可能性を整理する。

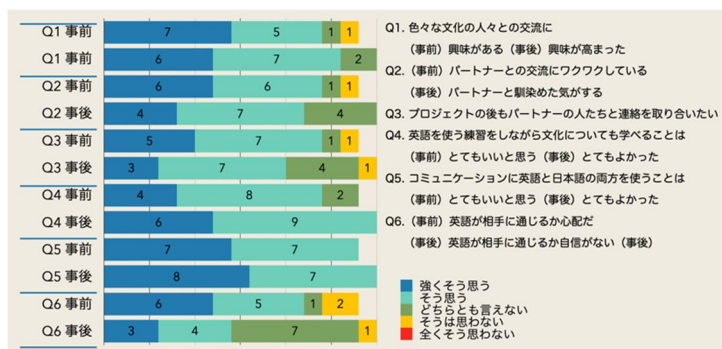
4. 研究成果

(1) 「動画をベースとした非同期型コミュニケーション」によるオンライン異文化交流の評価

2019年度の実践の評価：初中級言語学習者にとって、学んだ言語知識をスキルとして伸ばしていくには目標言語を用いたやりとりの経験が欠かせないが、未熟な言語でのリアルなやりとりは心理的なハードルも高い。目標言語でコミュニケーションを行い、異文化理解を深める機会として、オンライン異文化交流が外国語の授業に広く取り入れられている(0' Rurke, 2007; 0' Dowd, 2007)。本交流実践もその一つであるが、特に、日本人英語学習者に見られる英語使用に対する消極的態度に配慮して活動を設計した。動画ベースの交流は、心理的ハードルを下げつつ、リアルな相手との「リアル」な交流の中で目標言語を使う場として有効であることが確認できた。また、グループ単位の非同期型コミュニケーションであることから、時差の違いや交流相手との人数差に対する制限が緩く、広く柔軟な運用可能性がある。

【実施概要】2019年9月下旬から9週間、日本語を学ぶアメリカの大学生(日本語・日本文化をテーマとする選択クラスの受講生)20名(中国人7名を含む)と、英語を学ぶ日本の大学生(「異文化コミュニケーション」をテーマとするゼミナールの受講生)16名(ベトナム人1名を含む)の間でクラス間交流を行った。ほとんどの受講生の言語運用力はCEFRのA1-A2レベル相当であった。アメリカの参加者は、環境的に日本語母語話者との交流機会が乏しい。日本の参加者については、アルバイト先等で英語を使用する機会自体はあり、キャンパス内にも英語コミュニケーションのための施設がある。機会があっても尻込みしてしまうという態度的要因の方が大きい(山内, 2019)。各クラスで受講生を4チームに分け、日米各1チームをパートナーとする混合グループを4つ作った。チームごとに動画を作成・投稿し、相手チームの動画にコメントし合うのが必須課題である。9週間で各チーム4本の動画を作成し、最低でも8本の動画についてやりとりを行う計算である。

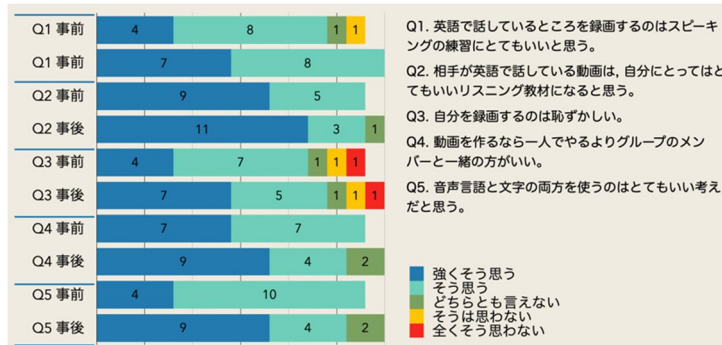
【初中級学習者の参加促進】自身の外国語運用、特に音声言語の利用に十分自信をもてない初中級者でも、本交流実践における6つの要素 - (a)映像の伝達力, (b)非同期型コミュニケーション, (c)チーム(少人数グループ)同士のやりとり, (d)母語と目標言語の二言語併用, (e)音声言語と文字言語の利用, (f)グループ課題としての動画作成 - がコミュニケーションのサポートとなり、有意義な交流を経験することが可能である。なお、2018年度の実践での反省から(山内, 2019)、グループ動画の作成・投稿のオプションを増やし、さらに、特に日本側でリマインダー等の介入を強化して、コンスタ



ントな投稿を確実にした。

【参加者の意識調査】事前事後の5件法による意識調査結果のうち、日本の大学生の回答(事前: n=15; 事後: n=15)に注目すると、左上図に示すように、異文化交流一般(Q1)やパートナーと交流(Q2)への関心は事前事後とも高く、二言語併用(Q5)についても、事前事後とも好反応であった。また、予想通り言語不安は高いが、不安軽減が観察でき(Q6)、「英語を話すことに前より自信がついた」という事後のみの項目については11名(7割強)の参加者が同意した。

左下図に示すように、英語学習者にとっての動画の有用性についても事前事後ともに好感触であり(Q1)(Q2)、音声言語と文字言語を使うやりとりについては2名が事後に評価を下げているものの(Q5)、「自分で英文を作っ



て話すことや、相手の話している内容をしっかり理解して英語でやり取りできて、少し英語に対して自信がついた」というコメントからも伺われるように、特に第二言語不安が高い学習者にとっては有効な方式であると言える。「自分の動画を撮るのは恥ずかしい」という反応は、予想通り事前事後ともに多い(Q3)が、グループ課題とすることでそのハードルが下がる(Q4)ことも確認できた。

【まとめ】参加者の肯定的なフィードバックから、(a)～(f)のサポートは概ねうまく機能したと言える。動画ベースの言語文化交流は、未熟な言語でのコミュニケーションに伴う不安を軽減しつつ、リアルな相手とのリアルに近い異文化接触の中で目標言語の使用経験を積むことができる学習活動である。このメリットを最大限に活かすには積極的な参加が不可欠であり、日本側については、教員の介入の強化がコンスタントな投稿につながった。初中級者ほど「強制」の要素が必要であると思われる。

2020年度以降の実践の評価：コロナ禍で全面的に遠隔授業となった2020年度は、本研究とは別に、通常の英語の授業における発話機会を確保することが急務であった。そうした状況下で利用が拡大したFlip(当時はFlipgridと呼ばれていた)を必修英語の授業課題として利用し、動画撮影と共有が一気に行える、非常に使いやすいツールであることを確認した。2021年度・2022年度は、Facebookの代わりにFlipをプラットフォームとして、動画ベースの交流を行った。本研究のプラットフォームとして評価すると、動画撮影と共有に関しては非常に使いやすいものの、Facebookを利用したと比べて、「グループ内でのやりとり」には向いていないと結論づけられる。一方で、Flipを利用した交流は、日本語を学ぶアメリカの英語母語話者、日本語を学ぶフィンランド人英語話者、英語を学ぶインドネシア人をパートナーとして複数回実施したが、動画を利用した非同期の交流が、授業活動として柔軟に運用できることは再確認できた。例えば、アメリカとの交流のうち1回は、日本語学習歴が短い初級者がパートナーだったが、あげた要素のうち、(a)映像の伝達力、(b)非同期型コミュニケーション、(c)チーム(少人数グループ)同士のやりとり、(d)母語と目標言語の二言語併用の効果により、興味深い言語文化交流が可能であることが確認できた。一方、この初級日本語学習者を含め、どの国のパートナーと比較しても、日本人英語学習者は自己開示の度合いが低い傾向が観察され、動画による自己表現の準備段階で、相手の反応を気にしすぎず(興味のないことだったらどうしよう等)、例や関連情報を出しながら話す内容を組み立てられるよう、意識的な支援が必要である。以上、2020年度以降の動画ベースの非同期型交流については、プラットフォームの比較検討、活動設計のオプションの提案、日本人学生のパフォーマンス評価を現在進めており、2023年度に実践報告を行う予定である。

(2)「同期型」交流の実施上の課題：上述の通り、2020年度は当初計画していた形での非同期の交流は実施できなかった。加えて、ビデオ会議を利用した同期的な交流への期待が高まると想定されたこともあり、授業活動としての交流活動として実施しようとする際、どのような点に留意すべきか洗い出しておく必要もあると考え、オンライン授業のルーティンとして、アメリカ人学部卒業生を招き、Conversation Practiceを実施した。なお、ビデオ会議を利用した同期的なやりとりを授業活動に組み込むとすると、当該授業の時間帯に参加可能な交流相手を見つけることが第一のハードルとなる。時差の問題があり、授業配当に裁量が効かない以上、「クラス対クラス」の交流をレギュラーなカリキュラムに組み込むことは一般に実施可能とは言えず、当該授業時間帯に参加可能な個人(以前の交流参加者や自大学、他大学の留学生など)を会話パートナーとして招待する形の方が、はるかに現実味がある。

【実施概要】2020年度秋学期、「異文化コミュニケーションおよび外国語習得」をテーマとするゼミの授業で、3年生14名(1名はベトナム人留学生)を3グループに分け、毎週20分Conversation Practiceの時間を設けた。会話パートナーは以前の交流参加者のアメリカ人2名と筆者が担当した。日本人学生は、2019年度に動画交流に参加し、2020年度春学期にはTeamsでの授業活動の一部として日本人同士のグループ会話練習も行っており、本実践に参加する準備はある程度出ていると想定していた。その週のVOA Learning Englishのレッスンに関連のあるトピック(交通機関、都会と田舎など)について自分が話す内容や質問したい内容を準備しておくこととし、会話遂行における目標も提示した。会話パートナーの2名には、振り返りレポートを書いてもらい、Zoomでのインタビュー兼アドバイスのセッションも実施した。

【話者交代の問題】話す力や聞く力、やりとり力が未熟な日本人英語学習者との同期的な交流について、第二言語不安や未熟な音声言語処理、言葉に詰まった時の沈黙、自己開示の低さ、言葉の短さ(言語運用力にも左右される)などを、コミュニケーションの阻害要因として想定していた。実践当時、筆者自身が気づいていなかった留意点として話者交替(ターン・テイキング:TT)様式の日英の違いがあげられる。西光(2017)によれば、日本語では(腹が立っている場合など)無視することも自然であるが、英語話者にとって、何か発言されたら必ず反応を発言して隣接ペアを形成するという制約が強い。伊東(2019)でも、日本語会話におけるTT様式を援用した特徴として(a)FPP(First-pair-parts:新しいやりとりにつながる自らの働きかけ)が少なく、(b)話し手もしくは聞き手の立場を固定しがちであるため、(c)双方向の会話が成立しにくくなること、また、(d)SPP(Second-pair-parts)不在(働きかけに対し何も発言しない)も起こることが観察される。(a)～(d)のような特徴は「英語での会話における発展性の低下を招く要因」となることが考えられる。

実際、日本人学生6人とアメリカ人会話パートナーとのある会話(2020.11.9;録画は8分間)では、ほとんどの話題は彼女からの質問の形で提供されていた。どう英語で表現するのかに

ついでのやりとりも多く、CR（明確化要求）に関わるやりとりを除くと、日本人学生たちの「回答」は15件カウントできたが、それら15件の回答のうち、そのターンでBI（ボーナス情報）、つまり会話を発展させるFPPが続いたケースは皆無であった（ただし、いくつかのターンを経て関連する追加情報を提供したケースは5件観察された）。会話パートナーにとっては、彼らから話題を振ることがなく、また質問に対する回答にBIが続くこともないため、「質問 回答」で完結し、また自分が次の質問をして（関連する）別の話題を提供するやりとりが続く。「教員」として学生たちの相手をしてきた筆者にとっては特に不自然な「会話」とも感じられないが、英語のTT様式を想定している者にとってはTT（話者交替）が起こらない会話がかかりストレスに感じられた可能性がある。この回の振り返りで、彼女は *“The students in general are continuing to get a little more confident when questioned, but there are still only one or two students who ever volunteer to just start talking.”* と述べており（下線は筆者）、別の会話パートナーも同じ週の振り返りで、*“I personally had trouble coming up with questions on the spot, so I created my own list of questions beforehand”* と述べている。彼女はさらに *“it seems that it is hard for Japanese students to ask/comment on the answer that someone else give”* とも述べている。上述の西光(2017)では、日本語話者とは違い、英語話者はその場にいる全員を会話の参加者と見なすことも指摘されており、この指摘を裏付ける振り返りだと言える。一方、日本人学習者のインタビュー兼アドバイスのセッションでも、「自分の番じゃないと思う」と発言しないと言う意見が複数聞かれた。こうしたTT様式における違い（文化に根ざした違い）により、例えば「質問された時に聞かれたことだけ答える」と言う行動は日本人にとっては自然だが、英語話者にとっては違和感が大きく、逆に、次の展開を期待してボーナス情報を提供し続けるのは英語話者にとって自然な行動だが、日本語話者は、ボーナス情報に反応して自ら次の質問やコメントをすることには非常に不慣れた行動ということになる。現在、こうしたTT様式の違いにも注目しつつ、会話パートナーや参加者の振り返りレポートやインタビューデータの分析を進めており、それに基づいて、実施可能な同期型コミュニケーションの実施オプションと実施の際の支援のポイントを整理し、2023年度に報告を行う計画である。

(3)「授業活動」としてのオンライン交流の実践モデル：(1)(2)を元に、英語習熟度の低い学習者に対する授業活動としてのオンライン交流について、期待できる効果と実施可能性を整理する計画である。

英語習熟度の低い学習者に対しては、交流活動への参加と並行して（同期型交流の場合は、その前に）音声英語を処理する（聞き取る）力を鍛えるトレーニングを組み込む必要がある。実際、交流活動や英語でのコミュニケーション場面に対して学習者が最初に抱く不安は「リスニング不安」であることが多い。英語教育においてリスニング力・スピーキング力・コミュニケーション力を養成することが重視されるようになって久しいが、現時点で入学してくる大学生たちは、知識の如何に関わらず、音声言語の処理能力が未熟である。初学者ではない大学生にとっては、特に、リスニング力の基礎であるボトムアップ・リスニング・スキル、つまり英語の Connected Speech に現れる音声変化に対応できるようにすることが急務である。ボトムアップ・リスニング・スキルに限れば、比較的短期間で、日英のリズムの違いを理解し、音声変化にある程度習熟することは可能である（山内, 2022; Yamauchi, 2022）。ある程度音声処理に慣れると「言っていることは分かるが、言いたいことが英語にならない」ことが不安だと言うようになる。

こうした傾向も踏まえ、音声処理の基礎トレーニングや意味を英語にする際の自動化トレーニングも含めて、初中級者向けのオンライン交流のオプションと実践モデルを提示したいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Yamauchi, Mari	4. 巻 2022
2. 論文標題 Individualized Bottom-Up Listening Skills Training through Self-Access Materials and Real-Time Instructions	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of EDULEARN22 Conference 4th-6th July, 2022: 14th International Conference on Education and New Learning Technologies	6. 最初と最後の頁 4791-4796
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 山内真理	4. 巻 59(1)
2. 論文標題 ボトムアップ処理力向上のためのリスニング指導：プロセ ス志向のアプローチに向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉商大紀要	6. 最初と最後の頁 37-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山内真理	4. 巻 58
2. 論文標題 「ニューノーマル」時代の外国語教育 授業・学習の「サイクル」をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 千葉商科大学紀要	6. 最初と最後の頁 51-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yamauchi, Mari	4. 巻 57(3)
2. 論文標題 Active Learning in the Japanese EFL Classroom.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉商大紀要	6. 最初と最後の頁 71-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山内 真理	4. 巻 57(2)
2. 論文標題 非同期型動画交換を軸としたクラス間異文化交流：より良い活動設計を目指して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 千葉商大紀要	6. 最初と最後の頁 59-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計12件(うち招待講演 3件/うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Yamauchi, Mari
2. 発表標題 Individualized Bottom-Up Listening Skills Training through Self-Access Materials and Real-Time Instructions
3. 学会等名 EduLearn 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yamauchi, Mari
2. 発表標題 Helping Students to Overcome Bottom-Up Listening Challenges through Voice of America Quizzes, Songs and Reaction Papers
3. 学会等名 JALTCALL 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山内真理
2. 発表標題 動画ベースの言語文化交流(初中級学習者向けリスニング・スピーキング実践)
3. 学会等名 言語教育エキスポ2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yamauchi, M.
2. 発表標題 Class-to-class intercultural video exchange.
3. 学会等名 CanTESOL 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yamauchi, M.
2. 発表標題 How can Duolingo work with your students?
3. 学会等名 EuroCALL 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Lander, B., Morgana, V., Knight, T., Selwood, J., Gettings, R., Yamauchi, M., Van de Vyver, J., and Delforge, C.
2. 発表標題 MALL tools tried and tested (MALL SIG SYMPOSIUM)
3. 学会等名 EuroCALL 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamauchi, M.
2. 発表標題 Group eTandem using asynchronous videos: A case study with a focus on foreign language anxiety among Japanese EFL learners
3. 学会等名 FLEAT VII (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamauchi, M.
2. 発表標題 Gain without Pain: Simple BYOD Tools for the Classroom
3. 学会等名 FLEAT VII (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木和子・山内真理
2. 発表標題 初中級言語学習者向けのクラス間言語交流
3. 学会等名 小出記念日本語教育研究会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamauchi, M. and Suzuki Carlson, K.
2. 発表標題 Group "eTandem" using asynchronous videos for mixed-ability language classes
3. 学会等名 APVEA 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------